

芥川 仮名書き・口語訳

仮名書き



むかしをとこありけりをんなのえうましかりけるをとしをへてよは
ひわたりけるをからうしてぬすみいていとくらきにきけりあくた
かはといふかはをゐてゆきければくさのうへにおきたりけるつゆをか
れはなにそとなむをとこにとひけるゆくさきおほくよもふけにけれ
はおにあるところともしらてかみさへいといみしうなりあめもいた
うふりければあはらなるくらにをんなをはおくにおしいれてをとこ
ゆみやなくひをおひてとくちにをりはやよもあけなむとおもひつつ
ゐたりけるにおにはやひとくちにくひてけりあなやといひけれとか
みなるさわきにえきかさりけりやうやうよもあけゆくにみれはゐ
てこしをんなもなしあしすりをしてなけともかひなししらすたまか
なにそとひとのとひしときつゆとこたへてきえなましものを

口語訳

- (一)昔、男がいたそうだと。
(二)女で男がとても妻としてえられそうもな
かった人を、何年もの間求婚し続けてい
たが、やっとのことで盗み出して、とて
も暗い中を来たそうだと。
(三)芥川という川のほとりを連れて通って行
ったところ、女は草の上に降りていた露
を見て、「あれは何かしら。」と男に尋ね
たそうだと。
(四)行く先の道のりも多く、夜も更けてしま
ったので、鬼がいる所とも知らないで、
雷までもがとてもひどく鳴り、雨もひど
く降ったので、
(五)荒れた隙間だらけの倉に女を奥に押し入
れて、男は弓と胡 背負って戸口に

- た。男は早く夜が明けてほしいと思い続
けて座っていた間に、鬼があつという間
に一口で女を食べてしまったそうだと。
(六)「あれえ」と言っただけで、雷が鳴る
騒ぎで、男はそのことを聞くことができ
なかったそうだと。
(七)ようやく夜が明けてゆくので、見ると連
れて来た女がいない。
(八)じだんだを踏んで泣いてもどうにもなら
ない。
(九)「白玉ですか何ですか？」とあの人が問
うたときに「露ですよ」と答えて露の
ように消えてしまいたかったのになあ
(そうすれば